

2016.2.18  
vol.46

# シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画  
を  
読む

## 本日の上映作品



### 2月18日(木)

① 10:30 ~ 12:30

② 14:00 ~ 16:00

終戦の日のパリで出会った元従軍記者で作家の卯チャールズと美しい娘ヘレン。やがて劇的にゴールインするが、ヘレンの姉マリオンもチャールズを愛していたが、傷心を抱えたままクロードと結婚。妹夫婦には娘ヴィッキーが誕生したが、奔放なヘレンは毎夜遊び歩き、家に寄りつかない。そのうち、夫も酒に溺れるようになる。ヘレンは病床に就きやがて死に、娘は姉夫婦のもとで育てられることに……。

監督：リチャード・ブルックス

出演：エリザベス・テイラー、ヴァン・ジョンソン  
ドナ・リード、ウォルター・ピジョン

製作：1955年アメリカ カラー

上映時間：116分

### 次年度上映予定 (毎回木曜日)

- |      |        |                 |
|------|--------|-----------------|
| 第47回 | 4月21日  | 『アラン・ドロンのゾロ』    |
| 第48回 | 5月19日  | 『椿姫』            |
| 第49回 | 6月16日  | 『明日へのチケット』      |
| 第50回 | 8月4日   | 『シェーン』          |
| 第51回 | 9月15日  | 『スプレンドール』       |
| 第52回 | 10月27日 | 『マダム・イン・ニューヨーク』 |
| 第53回 | 12月15日 | 『素晴らしき哉、人生』     |
| 第54回 | 1月19日  | 『ジェニイの家』        |
| 第55回 | 2月16日  | 『会議は踊る』         |

『シェーン』と『マダム・イン・ニューヨーク』は図書館では所蔵していませんが、上映作品の選択肢を広げるため、劇場上映用のDVDをレンタルします。上映時には関連の図書の紹介をしますので、ご利用下さい。

『マダム・イン・ニューヨーク』は、男女共同参画班との共催となります。また次年度は、上映前に福祉関係のご案内もさせていただきます。合わせて、映画を見る機会に視野を広げていただけたらと思います。

※ 上映作品は変更になる場合があります。  
※ 第3木曜日に限りませんのでご注意ください。

# 映画を読む 『 雨の朝パリに死す 』



ブルックス監督が描くロストジェネレーション K.M.

酒や享楽に溺れる「自堕落な世代」を意味する“失われた世代(ロストジェネレーション)”という言葉があります。ヘミングウェイがこの言葉を「日はまた昇る」のエピグラフに引用して以来、1920年代から1930年代に活躍したアメリカ人作家の作品は、ロストジェネレーションの文学と呼ばれるようになり、延いてはこの言葉は「第一次大戦後に青年期を迎えたアメリカ人」も指すようになりました。「ロスト」には「失われた」の他、「迷子の」「行き場の無い」という意味も持ちます。

今回の上映作品はヘミングウェイと並んでロストジェネレーションを代表する作家、フィッツジェラルドの短編小説「Babylon Revisited (1931)」をベースに、時代を第一次大戦後から第二次大戦中に設定しなおして映画化した、R・ブルックス監督 1954年の作品です。

作家志望のジャーナリストが、セレブラの享楽的世界に巻き込まれて行くという設定のドラマだということで、フェリーニの代表作『甘い生活 (1960)』に通ずるシリアスドラマを期待してDVDで下見をしたのですが、びっくりポン！「これが村上春樹がフィッツジェラルドの最高傑作の一つと称賛した作品の映画化なの？」「メロドラマにしては感情移入しにくい登場人物ばかりだな！」と、あまりいい印象は受けませんでした。ユーザーレビューを調べてみると、案の定「原作のよさがこの映画にはない」などとおおむね不評。

後に『暴力教室 (1955)』『熱いトタン屋根の猫 (1958)』『カラマゾフの兄弟 (1958)』『エルマー・ガントリー (1960)』などの問題作や名作をものにしたブルックスの作品だけ

ら、何か見方があるはずとさらに調べいくと、淀川長治さんの『世界クラシック名画 100 撰集』での解説に行き当たりました。「生活に飽き飽きするような時代、そういう頃のなんとも知れん、荒れた人生、荒れた感覚持つてる時代の怖い話ですね」「野暮ったらしい夫といかにも遊び女の感じの妻のアンマッチなカップル。でも心の底に愛がある二人の接吻シーン、この監督のいかにも生々しい感じが出ています」「なんとも知れん放埒な人間が、沢山出てきた第二次大戦時代の感覚がよく出ています」「リズ・テイラーはやっぱりただの美人じゃないんですね。ちゃんと演技してるんですね。見事な女の感覚出してるんですね。」などなど、目から鱗でした。

そうです、ブルックス監督はフィッツジェラルドの「ロストジェネレーション」とは違う、現在の私達から見ると実にいい加減の人たちがいっぱい「ロストジェネレーション」を描きたかったのかも。そしてこの作品、ひょっとしてあのフェリーニの名作『甘い生活 (1960)』にも影響を与えてるんじゃないかしら？と思えてきました。ちなみに、この作品、興行的にも成功し、リズ・テイラーはこの作品を踏み台に大作『ジャイアンツ (1956)』でのシリアスで存在感のある主役をゲット。続いて『愛情の花咲く樹 (1957)』『熱いトタン屋根の猫 (1958)』『去年の夏突然に (1959)』『バターフィールド 8 (1960)』と、4年連続アカデミー主演女優賞にノミネートされ、『バターフィールド 8 (1960)』では念願のアカデミー主演女優賞を獲得し、ハリウッドの頂点に駆け上がっていきます。

アカシアの 雨にうたれて このままー 死んでしまいたい 「りぶら講座」講師 鈴木素夫

昭和 35 年 (1960) 西田佐知子が歌った『アカシアの雨がやむとき』は、60 年安保闘争頃の時代の雰囲気 (喪失感、挫折感) を見事に表現した昭和の名曲として定着している。しかし実は、この歌がアメリカ映画『雨の朝パリに死す』をモチーフにしていることは、あまり知られていない。

この歌は、当時ポリドール専属の若き作詞家水木かおると同じく作曲家藤原秀行によって作られた。水木かおるが一貫して追及してきたテーマは「死と別れ」であった。それは、水木自身が 20 代で結核にかかり死の淵を歩んできた体験から生まれた物であった。曲名に「死」が含まれている物を拾うと、「死ぬまで一緒に」「死んで

もいい」「死が二人を決つまで」「死んでも離れない」と多い。いずれも西田佐知子が歌っている。

西田佐知子は、2010年12月、雑誌「文藝春秋」の60年安保闘争特集号に手記を寄せ、当時の様子を次のように回顧している。

「この曲は1960年に発売されました。ですが、人々が口ずさむようになったのは、発売から1、2年経ってからのことです。安保闘争のほとぼりから醒めて、沈んだ気分や、やりどころのない怒りが重なったのでしょう。歌詞を渡されたとき、当時21歳だった私には、さっぱり情景が浮かびませんでした。そこで、作詞家の水木かおるさんにお話しを伺うと、この詞は、『巴里に死す』（芹沢光治良著）と『雨の朝パりに死す』（フィッツジェラルド原作）をモチーフに書かれたと。「パリ」と聞いた瞬間に、ぼーと空が高く広がった気がして、ベンチで泣きながら座っている女性が、ぼんーと遠くに見えました。フォーカスしてゆくと、その女性は「死んでしまいたい」と小さくなっている自分でした。」

エリザベス・テイラー扮するヘレンが、冷たい雨のふる中倒れ、夫チャールズと死別してゆくシーンが、映画の中でどのように描かれているのか、密かに注目している。

平成27年度後期りぶら講座 講座N043

【日時】 3月1日(火) 10:00~11:30  
 【場所】 りぶら 103会議室(1階東端)  
 【講師】 鈴木 素夫

今改めて聴き返す「昭和の歌謡曲」

「六十年安保闘争」の前後に生まれた昭和の名曲  
 「アカシアの雨がやむとき」  
 「上を向いて歩こう」  
 その時代背景と作詞者の思い、人々の受け止め方は？

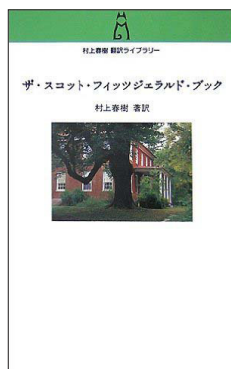
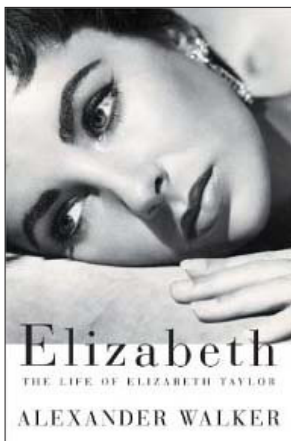
「アカシアの雨がやむとき」西田佐知子(昭和35)

「上を向いて歩こう」坂本九(昭和36)

時代を写し、時代を越え、人の心をとらえてきた昭和の歌謡曲。今、その歴史と意義を問う。

【申込み】 りぶら市民活動センター(23-3114)まで  
 【問合せ】 0564-46-3459(講師宅)  
 【主催】 りぶらサポータークラブ(協力:岡崎市)

『エリザベス・テイラー』	アレグザンダー・ウォーカー／著	朝日新聞社	778.253
『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』	村上春樹／著訳	中央公論新社	930.278
『バビロンに帰る』 ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック2	スコット・フィッツジェラルド／ [著]	中央公論社	933.7
『フィッツジェラルド短篇集』	フィッツジェラルド／[著]	岩波書店	933.7
『アカデミー賞の女優たち』	新人物往来社／編	新人物往来社	778.253
『映画でわかるアメリカ文化入門』	奥村みさ／著	松柏社	778.253
『アメリカ映画がわかる。』		朝日新聞社	778.253
『アメリカ文学と映画』原作から映像へ	曾根田憲三／著	開文社出版	778.253





## 第47回

### 『アラン・ドロンのゾロ』

4月21日(木)

① 10:30 ~ 12:30

② 14:00 ~ 16:00



何度も映画化されている英雄譚に、A・ドロンの挑んだ大活劇ロマン。ヒーロー然とした役所が案外少なかったドロンのサマになっており、S・ベイカーの悪役、O・ピッコロのヒロインも申し分無し。クライマックス、延々と続くチャンバラ決闘シーンを始め、D・テッサリのアクション演出も快調で、肩の凝らない娯楽作に仕上がっている。ガイド&マウリツィオ・デ・アンジェリスの軽快なテーマ曲もカッコいい！< allcinema >

監督：ドゥッチオ・テッサリ

出演：アラン・ドロン

オッタヴィア・ピッコロ

スタンリー・ベイカー

製作：1974年イタリア/フランス カラー

上映時間：120分

## サロン・ド・シネマ

### ホールホワイエにて

寄付金でお茶菓子を提供します。  
映画の上映前にご利用ください。

午後の部の上映終了後に、2階の活動コーナーにおきましてスタッフの打合せをしています。上映会の運営に関心のある方は、お気軽にご参加下さい。

## 賛助サポーターへのご案内

賛助サポーターは、年度更新となります。総会のご案内と共に更新のご案内を同封いたしますので、よろしくお願いたします。なお、ご寄付は随時受け付けておりますので、スタッフにお申し出ください。

## 『トップ・ハット』感想(一部)

- ・古き良き映画を有難う。アステアのダンスは素晴しかったです。また、楽しみにしています。
- ・なかなか良き時代の映画を大きなスクリーンで見られないので、今日はとても楽しめました。
- ・またフレッド・アステアが活躍した、映画が最大の娯楽であった時代のものを希望します。
- ・フレッド・アステア若いですね。でも私から見れば尊敬を抱く憧れの先輩。年令で何なの？
- ・フレッド・アステアの歌声とタップのリズムがとても魅力的で後年の映画もずっと見たい。
- ・アステアについていける女優、声、踊り最高です。同じような映画はもうできないでしょうね。
- ・踊りが素晴らしかった。豊かな時代。私は見たことがない映画でしたが、楽しい時が過ごせました。女優もチャーミングでした。
- ・このコンビの映画を何遍みたことか、二十代の頃を思い出し若返った感じです。
- ・若かりし頃ダンスをしていたころのことを思い出し、踊り出しそうになりました。
- ・社交ダンスとタップダンスをミックスした踊りが良かった。私はジムでエアロビクスの教室にでたりするので、体幹の強さが画面から伝わってきたことに感動しました。若者にジャニーズやエグザエルが人気があるのも分りますね。「機関車トーマス」の駅長さんがトップ・ハット卿という名前なのはあの帽子をかぶっているからなのね。今更ながらシルクハット以外の呼び名を知りました。
- ・ミュージカルもたまには良いですね。
- ・Musical大好きなので是非、また上映して下さい。
- ・好きなジャズナンバーを映画で見ることができ、楽しかった。
- ・少しの勘違いがコメディーになっている楽しい映画でした。軽快で素晴らしいダンスシーンもとてもよかったです。
- ・見事なダンスと曲。生活感の全くない映画でしたが楽しいシーンがいっぱい。
- ・ステキなスタイルとダンスで久しぶりの映画鑑賞ができました！ありがとうございます(^ ^)
- ・純粋に面白かったです。この映画の5年後に大戦が起こったなんて信じられません。